

教師に求められる力

福島 睦恵

1 はじめに

十人集まれば十人の教育論がありますが、教育論の行き着くところは教師論になってしまうものです。まさに「教育は人なり」です。

いつの時代でも、また洋の東西を問わず「良き教育は良き教師を持って始まる」ことに異論を唱える人はいないでしょう。

小学校教諭、小・中学校管理職、教育行政に携わってきた経験から「教師に求められる力」について、考えを述べてみたい。

2 教育の使命と教師の営み

教育とは何か。様々な視点から定義されています。

曰く、

教育とは、個人に対して他から意図的に働きかけて社会生活に必要な能力や資質を発達させる営みである。

教育とは、過去から未来へと連綿と続いていく文化的遺産の伝達作業である。

教育とは、学校・地域社会・家庭・職場など様々な場で行われている多様な人間形成の営みである。対象者は未成年者だけでなく成人も含む。

教育とは、未熟な状態で生まれてきた「ヒト」を一人前の「人間」に育てる営みである。等々

「狼に育てられた子 ―カマラとアマラの養

育日記―」（J.A.L. シング著 中野善達・清水知子訳 福村出版）を引き合いに出すまでもなく、人間は人間に教育を受けてはじめて人間になれる。教育は「人間」を育てるという途轍もなく大きな使命を果たす営みです。

そして、その使命を果たすために最も必要とされることは、学校教育においては一人ひとりの教師が日々子どもと真剣に向き合い、子どもに励まされながら続けている目立たない地道な取り組みであるといえます。先人の努力（地道な実践の積み重ね＝教育の根幹をなすもの）の上に現在の教育があることを忘れてはなりません。

3 子どもの心の内にある成長への願い

子どもはどのような境遇にあっても、心の内に「〇〇ができるようになりたい」「〇〇が分かるようになりたい」「人の役に立つ人間になりたい」等々、人間として成長していきたいという願いを持っています。どのような状況の子どもであっても、教育は子どもが持っている「成長への願い」を教師が信じることから始まると言えます。

4 教師に求められる力

中央教育審議会答申（平成17年10月）「新しい時代の義務教育を創造する」では「優れた教師の条件」として次の三点を挙げています。

① 教職に対する強い情熱

教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもへの愛情や責任感など

② 教育の専門家としての確かな力量

子どもの理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級づくりの力、学習指導・授業づくりの力、教材解釈の力など

③ 総合的な人間力

豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力など人格的資質、教職員全体との同僚としての協力姿勢など

さらに、平成18年7月の答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」では、「教職は、日々変化する子どもの教育に携わり、子どもの可能性を開く創造的な職業であり、このため、教員には、常に研究と修養に努め、専門性の向上を図ることが求められている。教員を取り巻く社会状況が急速に変化し、学校教育が抱える課題も複雑多様化する現在、教員には、不断に最新の専門的知識や指導技術等を身に付けていくことが重要になっており「学びの精神」がこれまで以上に強く求められている。」と述べています。

また、神奈川県「めざすべき教職員像」によれば（「教職員人材確保・育成基本計画」平成19年10月から抜粋）

〔人格的資質・情熱〕教職員としての人格的資質・教職への愛情

- ・豊かな人間性と社会性、高い対人関係能力とコミュニケーション能力をもっている
- ・子どもへの教育的愛情と責任感、教職に対する使命感と誇りをもっている
- ・高い倫理観をもち、公平・公正に行動できる
- ・変化に対応し、学び続ける向上心をもっている

〔課題解決力〕子どもや社会の変化による課題の把握と解決

・子どもをよく理解し、多様な教育的ニーズに対して適切に対処・指導できる

・得意分野をもち、個性豊かで、連携・協力しながら指導できる

・豊かな創造力をもち、新たな課題へ積極的に挑戦する意欲や実行力をもっている

・教職員全体と協力し、学校全体を意識しながら組織的に取り組むことができる

・保護者、地域の人々と協力して取り組むことができる

〔授業力〕子どもが自ら取り組むわかりやすい授業の実践

・子どものやる気を引き出し、意欲を高めることができる

・わかりやすい授業の実践ができる

・高い集団指導の力をもち、望ましい学級づくりができる

・授業研究を生かした校内研修に進んで取り組むことができる

ことが謳われている。

そこで、中教審答申「優れた教師の条件」や神奈川県「めざすべき教職員像」に述べられているような教師像を念頭におきながら、日々地道な努力をしている教師の姿を参考にして「教師に求められる力」について具体的に考えてみたい。

(1) 授業力

大磯町に児童自立支援施設である「神奈川県立おいそ学園」があります。学園の中に、児童福祉法の改正に伴い「大磯町立国府小学校国府中学校生沢分校」が平成15年4月に開校し、学園の子どもたちに学校教育を実施しています。

学園長が私（当時分校の校長を兼務していました）にお話をしてくれました。『中学二年の生徒が園長室に飛び込んできて「園長、円の面積の出し方知ってるか」と聞きますので「君は知っているの」と尋ねると「半径かける半径か

ける3.14だよ」と笑みを浮かべて得意げに答え、さらに「園長、このくらい知らなきゃだめだよ』と言ったそうです。学園長はこうも話してくれました。「校長先生、その子は学園に来て初めて勉強を教えてもらったと言ってました。分かるということは、子どもの瞳をあれほどまでに輝かせるものなのですね。分校の先生方には頭が下がります」と。

子どもたちはできなかったことができた時、分からなかったことが分かった時に心が震え、瞳を輝かし、笑顔を見せる。そのことを誰かに伝え分かって欲しいと願う。そのような子どもの心の興奮を幾つ生み出せるのかが、教師の授業力の証しです。

ですから、授業力を向上させることは教師にとって最優先に取り組まなければならない重要な使命です。そのために、子どもたち一人ひとりの「力」や「こころ」の把握、学習指導要領の熟読、教材研究の深化が欠かせません。さらに授業の質を向上させるために、授業を公開し様々な立場の方たちと授業をいろいろな視点から研究することが求められます。

なんとしても子どもたちに分かってもらいたいという熱い想い（情熱）がある教師、子どもに対する愛情のある教師は、子どもの興味関心を引くような授業、子どもが飛びついてくるような授業を目指して、試行錯誤しながら、労を惜しまず授業の質を磨いていく努力を続けることができます。

（2）子どもへの愛情

家庭環境、家族構成、生育暦、能力、性格、気質、発達の違い等々子どもたちは様々な荷物を背負って登校して来ます。一人ひとりを生かすことは「言うは易く行は難し」です。

人間の悲しみ、悩み等に相対的な「ものさし」はありません。それぞれの人の悩みは、それぞれに重いものです。子どもに寄り添い、心を込めて話を聞き、少しでも深い共感を持って

受け止めることができるかが教師に問われています。

下校する時、登校した時よりも少し背中の荷物が軽くなったと感じ、明日も先生や仲間会いたいと思う。そんな子どもたちを一人でも多く増やしていくことが教師に求められています。

私は、何度となく教員採用試験の面接官をした経験があります。面接で「健康面で不安がありますか」「体力に自信がありますか」と質問しますと、100%の人が「健康だけは自信があります」と答えます。運動を経験してきた人は「学生時代に〇〇部で体を鍛えてきましたので体力には自信があります」と答えます。

健康や体力に自信のある者が先生になりますと、心配なことがあります。御自分は小さいころから運動会や球技大会では大活躍をしてきた。前日はもの凄く嬉しくてワクワクしていたでしょうから、受け持っているクラスの中に、運動会の日、球技大会の日、体育のある日は、学校に行きたくないという子がいることになかなか気付かないものです。

遠足やキャンプなどでも同様で、乗り物酔いしたらどうしよう、お漏らしをしたらどうしよう、心配で心配で夜も眠れない子どもがいるということになかなか思いが至らないようです。

また、採用試験に合格する人は、子どものころから学習面でも成績優秀な人であったと思います。子どものころから成績優秀であったがために落とし穴が潜んでいるような気がします。授業を進める中で「なんで、こんなことが分からないの」「こうすればできるでしょう」「何度言ったら分かるの」と段々イライラしてきて、終には怒ってしまう先生が少なからずいることです。

よい教師とは、と問われればいろいろな答えが返ってくると思いますが共通して言えること

は「勉強の分からない子どもの気持ち分かる先生」「健康面や体力面に不安がある子どもの気持ち分かる先生」ということになるでしょう。

加えて言うとなれば「家庭環境の上で恵まれない子どもの気持ち分かる先生」を挙げたいと思います。私もよく失敗をしたのですが「お父さん、お母さんにお話してください」「お母さんに渡してね」「お父さんとどこかに行ったの」と、言ってしまったものです。今の時代はお父さんのいない家庭やお母さんのいない家庭の子どもが少なからずいます。そのような子どもが辛い思いや悲しい思いをしなくてすむような言葉遣い、心配りが教師に求められます。

家庭環境は人間的側面ばかりではありません。経済的に恵まれない状況の家庭の子どももおります。子どもが育っている家庭環境に心を配れる教師でありたいものです。

子どもに信頼されるということは、子どもの気持ち分かるということです。保護者に信頼されるということは、子を持つ親の気持ち分かるということです。目の前の子どもが、何に対してどれだけ心を悩ませているのかということに敏感に感じ取れるような感覚（感性）を磨く努力が強く求められます。

(3) 子どもから学ぶ力

私が教師生活10年を経て初めて小学校一年生の担任になった入学式でのことです。私が担任する子どもたちの中に、自席を離れなんとも訳の分からない踊りを踊っていたT君がいました。自閉症児のT君との二年間の戦いの始まりの日でした。

T君とのかかわりの中で、教師として10年間程培ってきた私の持っている力「引き出し」では全く通用しない場面が多々ありました。登下校、靴や衣服の着脱、手洗いやうがい、トイレ、給食、プール、言葉や数の学習等々数え切れないほど様々な場面で私の教師としての力量

が問われ続けました。「なぜなのか」「どうすればいいのか」その答えはT君から教えてもらうしかありませんでした。

『苦境にある人、Aにとって、何がもっとも適時、適切、適度な助力であるかを、すばやく見つけて実施にうつすのは、傍らにいる人、Bの役目である。その手助けが必要にして十分なものであったかどうかは、手助けそのものではなく、その手助けがAに及ぼした効果による。効果があらわれるかどうかは、Bの負うべき責任であり、Aではない。AはBの仕事の評価者の役割をもつことになる。それ故、教育の場は、Aは教え子であるとともに教師でもあり、Bは教師であるとともに教え子である（相互主客二役性）。教育の場に、楽しさ、うれしさがあるとなれば、それは関係成立が、主客ともどもの苦しみか、悲しみに根ざし、それぞれの力をつくし、お互いの効果を確かめあいながら、それぞれの秩序構成が進展していくところにある』

「重複障害児との相互輔生一行動体制と信号系活動一」（梅津八三著 東京大学出版会）

T君とのかかわりから学ぶことで、私の「引き出し」も沢山増やしてもらいました。その中の一つ「T君を学級経営の中心に位置付ける」について記します。

二年生の終わりが近づいたころT君の父親から手紙をいただきました。その一部を紹介します。

「入学当初殆ど言葉も口にできず席に着いていることさえ覚えなかったTがほんの少しの日常用語と簡単な数が言えるまでになりました。さらに加えて日ごろの態度たるや同年輩の子どもと変わらない自信に満ちたイタズラ坊主の風格までも備えてきました。障害児教育云々について、難しい議論はあろうかと思いますがTにとってどうであったかは今のこの状態が答えであろうと思い、これまでお力添えいただいた皆様に心より御礼申し上げる次第です。翻って囁

まれたりつねられたりしながら、この二年間ここまでTを育てくれた級友に対しTから出来たことは何なのでしょう。『Tが級友たちの中に居た事』としか言えないように思います。』

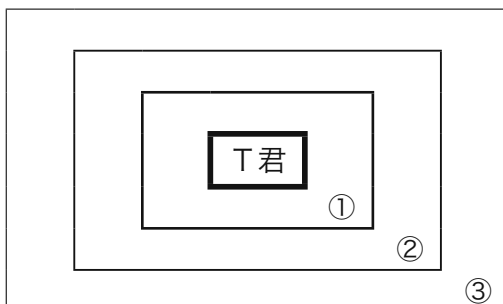
(下線は筆者)

父親が指摘している「T君が級友たちの中に居る事」とは、どういうことなのか。「T君が教室に居る事」ではなく「T君が級友たちの中に居る事」によって、T君と級友たちとの関係性が生まれ、その交流の中でT君は級友たちからいろいろな刺激を受けて成長できた。級友たちもまたT君が居たからこそいろいろな刺激を受けて成長できたと言うことだと思えます。

T君と級友とのかかわりを観察すると三つのグループに大別できました。①は、ぶたれたり、蹴られたりしながらも、T君と一番近いところで積極的に交流しているグループ。②は、T君に関心を持っていて声かけはするが、手の届かない距離に居るグループ。③は、T君と積極的には交流をしていないグループ。

深く交流した子どもほど関係が深まり、互いを理解しながら成長できた。T君が居たからこそ成長できた。このことを教師は意図的に進めなければならない訳です。つまり、T君を学級（級友たち）の中心に位置付けて、互いの交流を促し、理解を深めること。言い換えると教師には子ども同士を結びつけ、互いに学び合わせる力量が求められていると言えます。

T君を学級（級友）の中心に位置付ける



教師は③の子どもたちを②の位置へ、②の子どもたちを①の位置へ導かなければなりません。そのためには教師の立つ位置こそが問われることになります。教師が①の位置に立つことこそが、子どもたちを①の位置に導くことになります。子どもは教師の言葉からではなく、教師の立つ位置からより多くを学ぶからです。

障害を持っている子どもだけではありません。それぞれの場面で、立場の一番弱い子ども、ハンディを持っている子どもを学級の中心に位置づけ、教師が①の位置に立ち続けることで級友同士の交流を促し、互いに理解を深める合うことができるのです。

立場の一番弱い子、ハンディを持った子どもが居心地のよい場（学級）は、他の誰にとっても居心地がよい場（学級）であると言えます。

5 おわりに

子どもたちにとって生きて働きかける最大最良の環境は「教師」です。常に子どもたちに学ばれている（真似る）手本であるという自覚を持つことで、服装、身だしなみ、言葉遣い、仕草や立ち居振る舞い等々が素晴らしい環境（モデル）となります。

先生が好きになれば子どもは学校が好きになります。言葉遣いやノートに書く字までも先生に似てきます。そして勉強が好きになり学力が向上します。さらに先生の人間性、人柄に感化されて子どもは人間的に成長するのです。

前述の中教審答申に述べられているように、教師には研究と修養に不断の努力が欠かせませんし、「学びの精神」がこれまで以上に求められています。